

平成 30 年度秋田県総合政策審議会
第 3 回農林水産部会 議事要旨

1. 日時 平成 30 年 9 月 6 日（木） 午後 2 時～午後 4 時

2. 場所 総合庁舎 6 階 6 0 1 会議室

3. 出席者

【農林水産部会委員】

今 野 克 久	(有限会社今野農園代表取締役)
佐々木 昭	(秋田県漁業士会会長)
佐 藤 総 栄	(有限会社秋田グリーンサービス代表取締役)
舘 岡 美果子	(果夢園代表)

【県】

小 野 正 則	(農林水産部次長)
齋 藤 正 和	(農林水産部農林政策課長)
柴 田 靖	(農林水産部農業経済課長)
河 越 博 之	(農林水産部販売戦略室長)
石 川 厚	(農林水産部農山村振興課 政策監)
本 藤 昌 泰	(農林水産部水田総合利用課長)
播 磨 成 人	(農林水産部園芸振興課 主幹(兼) 班長)
小 沼 成 尚	(農林水産部畜産振興課 主幹(兼) 班長)
大 山 泰	(農林水産部農地整備課 主幹(兼) 班長)
齋 藤 和 敬	(農林水産部水産漁港課 主幹(兼) 班長)
石 山 正 喜	(農林水産部全国豊かな海づくり大会推進室長)
清 水 讓	(農林水産部林業木材産業課 主幹(兼) 班長)
眞 坂 京 子	(農林水産部森林整備課 主幹(兼) 班長)
畠 山 欣 也	(企画振興部総合政策課)
土 門 久仁子	(観光文化スポーツ部秋田うまいもの販売課)

【事務局】

秋田県農林水産部農林政策課

4. 部会長あいさつ

◎今野部会長

8月16日に開催された企画部会では、健康長寿・地域共生社会部会から、農林水産部会への提案として、企業における健康経営、健康づくりに向けた取り組みを検討してほしいと御提案いただいたところである。今回の提言（案）では、農業の働き方改革に関連した内容もあると思うので、皆様からは忌憚ない御意見をいただきたい。

5. 議事要旨

◎今野部会長

議事を始める前に、一言申し添える。審議内容は議事録としてホームページに掲載される。その際には、委員名は特に秘匿する必要が無いと思うので、公開としたい。

それでは議事（1）について、事務局から説明をお願いします。

□事務局（農林政策課）

～資料1により説明～

◎今野部会長

ただいまの事務局の説明について、委員の皆様の御意見をまとめたものということで良いか。

～意見無し～

それでは、次に議事（2）について、事務局から説明をお願いします。

□事務局（農林政策課）

～資料2により説明～

◎今野部会長

ただ今、事務局から説明があった提言（案）について意見を伺いたい。

1つ目の「人口減少社会を見据えた多様な担い手・労働力の確保について」だが、これに関して、意見や追加するべき取組などについて、発言をお願いしたい。

では、はじめに館岡委員からお願いしたい。

◎館岡委員

農家が農地中間管理機構の活用方法を理解しておらず、耕作できなくなった農地がそのまま放棄される場合があることから、活用方法について情報発信してほしい。また、高齢等の理由により耕作できなくなった場合など、農業委員会や県に対して気軽

に相談できる体制づくりや、問い合わせさえすれば、何とかなるという情報を発信するだけでも良いと思う。

◎今野部会長

農業委員会が耕作放棄地の地権者を調べ、誰かに貸し付けできるように支援するなどの取組があれば良いと思うが、手続きは難しいのか。

◎館岡委員

手続きについては簡略化されると聞いた。

□農林政策課 齋藤課長

地権者が亡くなっていると、手続きが困難となるケースがあるが、簡略化することで法改正が進められている。

◎館岡委員

耕作できなくなった時、荒れる前に農業委員会や農協が声をかけて、貸し付けできるような体制づくりをしてほしい。荒れてからでは借り受けた人はいなくなってしまう。

◎今野部会長

次に佐藤委員から発言をお願いしたい。

◎佐藤委員

林業においては、森林環境税の導入により、放棄されている森林の管理など業務量が増えてくることが想定され、今後、労働力の確保がより大きな課題となる。さらに、確保した労働力に対して、十分な指導ができる能力が重要となってくる。

指導については、林業大学校でもできるが、現場のプロフェッショナルに教えてもらう必要がある。また、企業の場合、若手が多い企業では、若手の先輩が今の時代にあった指導ができるが、若手のいない企業では、昔ながらの指導しかできず、若手をうまく育てられないということもある。

◎今野部会長

社長が全部教えるわけにはいかないし、中堅どころの指導力が大事だと思う。

◎佐藤委員

現場のリーダーとなる人材が必要であり、昔のやり方を押しつけられるような状況から守ってくれる存在がいないと、若手を育てるのは難しい。

◎今野部会長

次に佐々木委員より発言をお願いしたい。

◎佐々木委員

漁業は危険な作業が多いため、どうしても厳しい指導になる傾向がある。また、1～2年目の新人は作業に慣れていないことや、一人前になるために時間を要することから、就業希望者を半年間雇っても、仕事を覚えられないまま研修を終えてしまうため、定着につながるものが少ない。

◎今野部会長

漁業では、農の雇用と同じような制度はあるのか。

□水産漁港課 齋藤 主幹（兼）班長

体験からはじまり、長ければ数年間研修する制度がある。

◎今野部会長

定着率は高いのか。

◎佐々木委員

高くはなく、農業に比べると厳しい状況である。定着するのは10人に1人くらいの割合である。

◎今野部会長

農の雇用では要件が変わり、定着率が低いと、制度の活用ができなくなると聞いたが、どうなのか。

□農林政策課 齋藤課長

過去5年間で受給した人の半数が定着しない企業は、制度が活用できなくなるという要件がある。

◎今野部会長

林業については、農の雇用のような制度はあるのか。

◎佐藤委員

国の雇用制度で3年間支援を受けられるものがある。

◎今野部会長

定着率はどの程度か。

□林業木材産業課 清水 主幹（兼）班長

県で実施しているニューグリーンマイスター育成研修の研修生の追跡調査では、定着率は75%程度である。

◎今野部会長

農業の定着率はどうなのか。

□農林政策課 齋藤課長

農業においては、研修制度を活用して自営就農した人の定着率は高く、離職率は数%程度である。ただし、法人への雇用就農した人の離職率は2割程度である。

◎今野部会長

最後に私から意見を述べさせていただく。これまでの話を聞くと、興味を持って研修に来てくれる人は多いと感じたが、その人達をいかに定着させるかということが課題になってくると思われる。

農林水産省のホームページに「農業の働き方改革経営者向けガイド」というものがあり、企業として経営するためのマニュアルがまとめられていた。これをたたき台にして、経営状況が厳しい法人をチェックするような仕組みがあれば良いのではないか。

また、農業は好きだが、職場が合わなかったため、現在は農業以外の仕事に就いている人の話を聞いたことがある。そういう人に対して就業先を紹介するなど、再び農業に従事できるような仕組みも必要ではないか。

それでは2つ目の提言「ICT等の先端技術を活用した次世代型農林水産業の推進について」だが、これに関して、意見や追加すべき取組などについて、発言をお願いしたい。

はじめに、佐藤委員から発言をお願いしたい。

◎佐藤委員

提言（案）に書いてあるとおりで、追加する取組等の意見は無い。

◎今野部会長

では、次に佐々木委員から発言をお願いしたい。

◎佐々木委員

テレビで先端技術を活用した北海道のミズダコ漁を見た。船に3つのボタンがあり、水揚げした重量ごとにボタンを押すことで、重量と水揚げした地点がデータとして集約され、他の漁船にタブレットを通じて情報が伝達されるシステムだった。システムの活用により、漁獲量が前年より増えたとのことだったので、ICTの活用で漁獲量は増えるのだと実感した。

◎今野部会長

ある程度の大きさのミズダコがどこにいるか分かるようになるということか。

◎佐々木委員

ミズダコの大きさや捕獲した位置が、他の漁船のデータも含めて把握できるとのこと。ベテランの漁師はどこで獲れるか分かってしまうので、嫌がるものと思っていたが、それでも他の漁師には負けないと言っていた。

◎今野部会長

全体として、利益が上がっているのか。

◎佐々木委員

利益は上がっているとのこと。

◎今野部会長

漁業におけるＩＣＴの活用はイメージしづらかったが、日本政策金融公庫発行の冊子で漁業を特集しており、カツオの一本釣りロボットが掲載されていた。これを見てＩＣＴは様々な作業に対応できると思ったほか、まだまだ開発の余地があるのだと感じた。

◎佐々木委員

漁業は他分野と比べてＩＣＴの導入が遅れているが、北海道の取組がテレビで取り上げられていることを見て、今後、ＩＣＴの導入は進むと思われる。

◎今野部会長

県立大学と連携し、現場のニーズを伝えて、新たなシステムを開発することも可能だと思うので、行政が橋渡し役として取り組むことができれば面白いのではないかと。

では、次に館岡委員から発言をお願いしたい。

◎館岡委員

先端技術の導入は費用がかかるというイメージがある。また、パワーアシストスーツなどは、怪我や病気が無く、健康な人は必要ないと思う人が多いため、高齢者など必要に迫られた人でないと導入しないのではないかと。

◎今野部会長

自動収穫機などがあれば、助かると思うが。

◎館岡委員

果樹においては、手作業が多く、自動化してほしい。しかし、りんごのように味は

同じだが、人がより美味しく感じる赤い色のりんごを選んで収穫する作業などは人間の目で見ないと判断できない。もちろん、この他に何か作業に活用できるものがあれば良いとは思っている。

◎今野部会長

最後に私から発言させていただく。先日、東京工業大学のオープンキャンパスに子どもを連れて行き、人工知能や自動車の自動操縦など、最新の技術に触れる機会があった。農業に取り入れたいと思ったが、価格が高いという問題がある。そこで環境制御システムを自作することを勧める本を購入した。部品を購入して装置を組み立てる必要があるが、システムのプログラムがネット上に公開されており、最終的にハウスの風通しを自動で開閉させることも可能になるとのことだった。ただし、自分にカスタマイズしたより高度なシステムとするには、プログラム言語などが扱えないと対応できないので、県立大学と連携して、秋田に合ったもので活用しやすいシステムを開発するなどの取組ができれば良い。

また、提言の具体的な取組方策に、若手生産者の技術向上に向けた熟練技術の「見える化」とあるが、実現に向けてぜひ取り組んでいただきたい。

それでは3つ目の提言「複合型生産構造への転換に向けた取組のパワーアップについて」だが、これに関して、意見や追加すべき取組などについて、発言をお願いしたい。

はじめに、舘岡委員から発言をお願いしたい。

◎舘岡委員

潟上市では、基盤整備が進んでいない地域があり、若手農家から大区画の農地で営農したいという要望があるが、地区内の農地を所有する高齢の農家の反対があり、基盤整備は進まない状況にある。そういった農家がリタイアするときには、基盤整備を実施して、若手農家などのやれる人に集約するべきだと思う。そうすれば複合化も進むと思っている。

◎今野部会長

では、次に佐藤委員から発言をお願いしたい。

◎佐藤委員

質問したいのだが、今、米の需要と供給の現状はどういう状況なのか。

◎今野部会長

全体として、在庫が余っている状況である。

□水田総合利用課 本藤課長

全国で190万t、秋田県で13万t程度の在庫があるが、最近は業務用米の需要

が多い。本県は家庭用の米が中心となっており、全体の約8割を占めている。今後は業務用米の生産割合を高めたいと思っているが、業務用は家庭用に比べて価格が低いので、多収性品種の導入や低コスト化を図っていきたい。いずれにしても産地側が実需者のニーズに応えられるように取り組んでいきたい。

◎佐藤委員

米を安く売るのではなく、加工により付加価値を付けて輸出するなどの取組ができれば良いのではと思っている。国際的に米の需要は高く、日本の米は売れるという話を聞いた。また、東南アジアやアメリカで日本食がブームとなっていることから、輸出に取り組む価値はある。

◎今野部会長

では、次に佐々木委員から発言をお願いしたい。

◎佐々木委員

水田を汎用化して枝豆を栽培するなど、新たに何かに取り組むということは、失敗するリスクも当然あるので大変だと思う。漁業においても新たに何かに取り組むということは、失敗のリスクがあるため、取組の成功事例があれば、後から続きやすい。

◎今野部会長

能代のメガ団地は販売額が1億円を超えて、サテライトが増えてきていると聞いた。同じように、販売額が伸びている枝豆などの栽培面積は拡大されてきているのか。

□農林政策課 齋藤課長

枝豆のほか、ニンニクやしいたけも拡大してきている。

◎今野部会長

大館市にあるアグリ川田を視察したが、県外からも視察団が来ていた。アグリ川田では枝豆の色彩選別機を導入したほか、包装してスーパーに出荷しているとのこと。このように成功している取組を見れば、同じように機械を導入する法人も増えてくるだろうと感じた。

では、最後に私から意見させていただく。

現在、大潟村では水稻に変わるものとして、たまねぎの栽培に取り組んでおり、複合型生産構造への転換に向けて、チャレンジしている。しかし、新しいことに取り組めば、失敗するリスクがあるので、失敗したときにどうフォローするのか、あるいは成果を挙げている場合には、何をすればより成果を伸ばせるか考え、取り組むことが次へのステップだと思っている。アグリ川田は常に日々改善と言っていた。

メガ団地においては、販売額が1億円を超えても、次は品質の向上など、常に何を改善すべきか考え、取り組むことが重要である。

ところで、新聞で秋田米の新品種デビューの記事をみたが、どんな戦略を考えているのか。

□水田総合利用課 本藤課長

現在、4つの作業部会を設置して、他県の取組を調査しながら、新品種デビューの戦略を練っているところである。

◎今野部会長

ゆめぴりかはテレビがきっかけとなった。こういった形でPRしていくのか気になるところであるが、例えば、食味コンクールなどのイベントを全県域で開催することで、メディアを通した良い宣伝となるのではないかと。地域全体の底上げにもなると思う。

それでは4つ目の提言「『ウッドファーストあきた』による林業・木材産業の成長産業化について」だが、これに関して、意見や追加すべき取組などについて、発言をお願いしたい。

はじめに佐藤委員から発言をお願いしたい。

◎佐藤委員

記載されている取組そのものに意見はないが、生産に関する提言が少ないので、追加してほしい。現在、木材の価格は底値で安定しており、低コスト生産に取り組むしかない。しかし、低コスト化を進めるためには、現在のシステムでは頭打ちであり、機械価格が上昇している中で利益を上げるには、生産システムそのものを抜本的に改革していかなければならない。

また、再造林に取り組んでいるが、手間と労力を要する非常に大変な作業である。機械化などにより効率化を図らなければ、再造林の取組はなかなか進まない。

大変な作業である生産部分をさらに機械化するなど、効率化していく取組を盛り込んでほしい。

◎今野部会長

再造林は伐採後、すぐ植えれば良いのか。

◎佐藤委員

伐採直後は周辺の植生がないため、その時に植えることができれば良い。ただし生産側は量が求められるため、再造林に人手をかけると、伐採そのものの作業に支障が出る。もちろん再造林も必要だが、まずは効率化を進めることが重要である。

◎今野部会長

再造林は手作業だと思われるが、実際どうなのか。

◎佐藤委員

ほとんど手作業であるため、多くても1人1日200～250本程度しか植えられない。作業用機械は開発されているが、実用段階ではないのが現状である。

◎今野部会長

木材の価格は底値安定状態とのことだったが、価格が上がるのはどのような時か。

◎佐藤委員

夏から秋にかけては、市場で木材が少なくなり、価格が少し上がる。また、20年前の価格と比べると半値程度となっている。

◎今野部会長

それでは5つ目の提言である「魅力ある農山漁村地域の活性化と保全管理の推進について」だが、これに関して、意見や追加すべき取組などについて、発言をお願いしたい。

はじめに佐々木委員から発言をお願いしたい。

◎佐々木委員

先日、水産振興センターを見学してきた。秋田県は湾が無く、養殖に取り組めるところが少ないため、センターで稚魚放流に取り組んでもらっているが、大変心強く感じている。また、全国豊かな海づくり大会が来年開催されるので、大会を契機に少しでも秋田県の漁業が盛り上がれば良いと思っている。

◎今野部会長

全国豊かな海づくり大会は、各都道府県で毎年持ち回りで開催するものなのか。

□水産漁港課全国豊かな海づくり大会推進室 石山室長

持ち回りである。今年は高知県で開催し、来年に秋田県で開催する。大会を契機に、県内の販売店や飲食店等と連携して秋田県の地魚をPRしていきたいと考えている。

◎今野部会長

秋田の昔ながらの魚食文化について、大会を通じて発信できれば良いと思う。
では、次に館岡委員よりご発言をお願いします。

◎館岡委員

潟上市であれば、石川理紀之助の出生地ということを活かし、県内の大学生や地元の小学校等と連携した取組を実施している。そういった既存の取組を発信できれば、同じように取り組む地域が出てくるのではないかと。

◎今野部会長

では、次に佐藤委員から発言をお願いしたい。

◎佐藤委員

先日、NPO法人とタイアップし、木育授業を実施した。対象は小学生以上の親子で、県外の参加希望者も多く、募集開始後すぐに定員となる。そこで感じたことは、一次産業の体験は、それほど多くあるわけではないので、もっと増やすことはできないか。釣り体験などがあれば、面白いと思う。また、秋田県は自然環境が豊かなのに、それを生かしたアクティビティが少ない。私は仕事で山にすることが多いが、現場の自然環境を見ると、こんなアクティビティができるのではないかと思うことが多い。実際にはいろんなアクティビティがあり、情報発信されていないだけかもしれないが、調べてみると少ないと感じる。そういったものが多ければ県外からも訪れる人がたくさんいると思う。まずはどんなアクティビティができるか掘り起こしてみてもどうか。

◎今野部会長

私は、たんぼの生き物観察会を有機栽培の水田で12～13年ほど続けている。県外に情報発信しているわけではないが、例年、秋田市や男鹿市の小学1～3年生が約30人参加している。様々な生き物を見たり、触ったりするほか、専門家による生き物の解説などの内容となっており、ニーズはあると感じている。しかしながら収益が得られるほどの活動へ発展させるためには、仕組みそのものを何段階も磨きあげなければならないと思っている。また、受入側として、安全管理について十分に考慮しなければいけないほか、来たときにがっかりさせないように、ある程度の環境整備は必須と感じている。

ゲンゴロウが絶滅危惧種になっていないのは、秋田県と沖縄県のみであり、ゲンゴロウが住めるような自然環境を守っているということを強みに、秋田県の農産物は安全だとPRしていくことも、魅力ある農山漁村地域としてPRする方法の一つだと思う。

◎今野部会長

本日示された提言案については、具体的な取組事項等に関して、委員の皆様より意見が多数あった。総合政策審議会も迫っていることから、今回の意見交換を踏まえた修正案は、私(部会長)と事務局で調整して最終案を作成し、審議会で提言したい。

これにて、議事をすべて終了する。進行を事務局にお返しする。

6. 閉会あいさつ

□農林水産部 小野次長

これまで3回に渡り、委員の皆様の長年の経験に基づいた貴重なご意見をいただき感謝申し上げます。

県内では5月の豪雨や台風21号による被害のほか、他県では地震など、様々な災害が発生しており、改めて自然を相手にする農林水産業の厳しさを感じているところであり、生産性の向上だけでなく、防災減災の観点も含めて取り組んでいかなければならない。

本日いただいた御意見に基づき、提言（案）を修正し、来年度の当初予算の編成に反映してまいりたい。

次年度も引き続き、御意見いただけるようお願い申し上げます。